

# Nationwide Temporal Trends in Clinical Characteristics and Treatment of Dilated Cardiomyopathy From 2003 to 2013 in Japan: A Report From Clinical Personal Records

筒井, 好知

<https://hdl.handle.net/2324/7363656>

---

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International



(別紙様式2)

氏名	筒井 好知
論文名	Nationwide Temporal Trends in Clinical Characteristics and Treatment of Dilated Cardiomyopathy From 2003 to 2013 in Japan -A Report From Clinical Personal Records- (我が国における拡張型心筋症の臨床像・治療内容の変遷)
論文調査委員	主査 九州大学 教授 塩瀬 明 副査 九州大学 教授 鴨打 正浩 副査 九州大学 教授 山浦 健

### 論文審査の結果の要旨

【背景】日本における拡張型心筋症 (DCM) の臨床的特徴および治療の変遷についてほとんど知られていない。

【方法】2003年から2013年のDCMの人口統計、心エコー、治療に関するデータを日本厚生労働省による全国登録である臨床調査個人票から収集した。

【結果】スクリーニングされた40,794例のDCM患者のうち、左室駆出率 (LVEF) 50%未満で年齢18歳以上の27,702例が本研究に登録され、登録年により3群に分類した。第1群: 2003~2005年 (10,006例)、第2群: 2006~2010年 (11,252例)、第3群: 2011~2013年 (6,444例)。経時的に、登録時年齢 (平均 [±SD] 58.6±13.0歳 vs 56.8±13.8歳 vs 56.2±13.8歳;  $P<0.001$ ) およびLVEF (33.5±10.0% vs 31.1±9.9% vs 29.2±9.7%;  $P<0.001$ ) が低下し、ニューヨーク心臓協会心機能分類 (NYHA) III~IVの患者が増加した (28.2% vs 35.2% vs 41.0%;  $P<0.001$ )。またβ遮断薬 (59.1% vs. 79.3% vs. 87.8%;  $P<0.001$ ) とミネラルコルチコイド受容体拮抗薬 (30.6% vs. 35.8% vs. 39.7%;  $P<0.001$ ) の処方率は経時的に増加した。多変量解析では、男性、収縮期血圧、慢性腎臓病、ヘモグロビン、登録年はβ遮断薬処方と正の相関を示したが、年齢とLVEFは負の相関を示した。

【結論】日本におけるDCMの臨床的特徴は変化する一方で、至適薬物療法の導入率は増加した。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士 (医学) の学位に値すると認める。